

沖縄では忘れがたき方々があります。一人は平和運動家であり彫刻家の「金城実」さん、いま一人は、ヤチムンの総大将「大嶺實清」さんです。「金城実」さんは、NHKの取材班がたびたび訪れるほど知名度の高い方です。読谷村の日航ホテル前の丘を少し登った所に、彼のアトリエがあります。わたしより一つ年上の彼です。京都外大を出てから、大阪の夜間の教師を数年勤めてから、読谷村にアトリエを構えたようです。隣りの家が機密諜報部勤務の米人と聞いて驚きました。流暢な英語で話せます。隠れたうちなんちゅうのインテリと拝見していたら、自から「沖縄の野蛮人」と言うではありませんか。彼の風貌がそう言わせていたようです。

忘れがたいことと言えば、見知らぬヤマトンチュウのわたしを、彼の懐の内まで受け入れてくれたことです。本土では、どれほど長い付き合いをしても、ここほどの深い出会いはありえないと思われます。

彼は、沖縄ヤスク二訴訟の原告団代表でもありました。那覇地方裁判所までの送り迎えはわたしがお手伝いをしながら、二十数回、公判は続きました。月明りない夜、サトウキビ畑の道を運転していた時のことです。「結城さん、沖縄は悲しいですな・・・、分かりますか」と言うのです。「なだそうそうなんて、くそくらえ」と吐き出すように言います。支配され、搾取されてきた悲しい歴史から醸造された「沖縄根性」(チムグクル)と、はじめて出会いました。

沖縄は、あたりが暗くなり始めると元気になります。サンシンの音がどこからともなく聞こえてきます。「ここは沖縄だ、泡盛を呑め」と強要されました。45度の強い酒です、しかし、何とも良い香りが漂う酒です。お相伴は一口だけで勘弁していただきました。真夜中過ぎても、客人は時間をあまり気にしません。本土では常識知らずの人間といわれるでしょう。緩やかに時は流れ、深夜一時、二時になっても、まるでお互いお構いなしです。気が付けば沖縄の人は時計を持ち合わせていません。時間と空間とを超越したヘブライ的時の流れの中で生きていると思われました。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城晋次